

この夏、お祭りや花火大会など、何力所か夏のイベントに参加する機会があった。最近の若者は和装離れが顕著であると聞いていたが、なんのなんの、今年はそのような場所ですら浴衣姿の女の娘を多く見かけた。

最近の浴衣といえば、帯なども簡単に締められるものが登場して、着物を着るのは大変だ、面倒くさいというイメージをぬぐい去ったからではないだろうか。

それにはやはり女性の着物姿は楚楚として結構である。女性がより女性らしく見える。と思いきや、地べたに足を投げ出してベタッと座り込んでいる若い娘を見かけた。アタシは思わず「おいおい」

と、声を出してつぶやいた。

適自言言

の 売 健 ら ぎ な



なった。

多少着崩れをしていたり、口までまくり上げている女の娘の集団。たぶん、男性がそののなら、またどうにか眼をんな様子で歩いているのを眼につぶつぶ。いずれ慣れてくれにして、まねをしてみたかった。うまく着付けをできるよたのに違いない。だがもし、うになるだろう。しかし、地あれが格好いいと思っ

浴衣の着方

面に直接座り込んでいるなんていうのなら、それは大いなお、アタシやたとえそれがジる勘違いである。百歩譲って、ズ姿だとしても納得でき、格好よくはない。親父が、縁台将棋を打っているわけ

「あーあ」と嘆かわしく思はないんだから……。



イラスト・栗山 邦正

着物を着る

と、所作や歩き方までが変わるといわれたきたのは、あれは一体なんだったのだろう。下駄の代わりにヒールのあるサンダルを履いて、大またで闊歩する。あれでは着崩れていくのも仕方がない。

もっとも昔ながらの風習や伝統が希薄になっていく今日、着物を見直す傾向というのは悪いことではないと思う。悪いことではないのだが、やはり基本を守ることは必要なのではないだろうか。基本を知っていて今様にアレンジするのや、そこに個性を求めるとは、それを知っているのと知らないのでは、全く意味合いが違ってくるからである。

↓
シンガー・サンダライタ